

王弟ヴィータショーカの物語

- *Divyāvadāna* 第 28 章 *Vītaśokāvadāna* 和訳 -

岡本健資

はじめに

ここに和訳するのは説一切有部系の説話集『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(*Divyāvadāna*)の第 28 章にあたる「ヴィータショーカ・アヴァダーナ」(*Vītaśokāvadāna*)である¹。この章は *Divyāvadāna* における他の章と同様、主人公の現在世物語と過去世の因縁譚から成る。現在世物語は、アショーカ王の弟ヴィータショーカが仏教に帰依し、後に出家して阿羅漢となり、外道と間違われて殺害されるまでの半生を描く。過去世の因縁譚はヴィータショーカが「殺害されたこと」と「高貴な家系に生まれ、後に阿羅漢となったこと」の理由を説明している。

尚、この章には、アショーカとヴィータショーカによる仏教出家者の生活形態に関わる議論が存在しており、章全体の約半分を占めている。最初ヴィータショーカは外道の出家者を信仰しており、貧しい生活を送る苦行者ですら欲望を完全に抑制できていないのに、安楽な生活を楽しむ仏教の出家者に欲望の抑制はできないとして非難する。これに対し、アショーカ王は巧みな手段を用いて、仏教の出家者が死の恐怖を絶えず感じるにより、安楽な生活を送っていてもそれを楽しむことはなく、抑制的な心を保っていることを理解させる。アショーカによって代弁される仏教側の主張、すなわち、安楽な生活形態においても「欲望の抑制」が実現可能という主張を示すことが、この章のテーマの一つであるようだ。

¹*Divyāvadāna* は、アショーカ王にまつわる四つの章(第 26~29 章)を含んでいる。これら四章に限って言えば、ほぼ同じ内容を含む漢訳『阿育王伝』が 306 年に訳出されていることから、紀元後 3 世紀頃までに成立していた可能性が高い。

翻訳に際して

以下に、翻訳にあたって使用したテキストと、引用または参考にした主な資料を以下に挙げる²。尚、今回底本としたのは E. B. Cowell 氏と R. A. Neil 氏による校訂本である。

【梵文原典】

- *The Divyāvadāna: Collection of Early Buddhist Legends*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886; Reprint Delhi: Indological Book House, 1987, pp. 419.15-429.5.
- *Divyāvadānam*, Buddhist Sanskrit Texts, no. 20, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga, Bihar: Mithila Institute, 1959, pp. 272-278.
- *The Aśokāvadāna: Sanskrit text compared with Chinese versions*, edited by S. K. Mukhopadhyaya, Delhi: Sahitya Akademi, 1963, pp. 56-70.

【漢訳】

- 『阿育王伝』(大正 50, No. 2042, pp. 106a20-107c28) .
- 『阿育王経』(大正 50, No. 2043, pp. 141b6-144a4) .

【翻訳】

この物語の現代語訳としては以下のものが存在する。

- Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme Indien*, Paris, 1876, pp. 370-379.
- 定方晟 『アショーカ王伝』 京都：法蔵館, 1982, pp.137-159.
- John S. Strong, *Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton: Princeton University Press, 1983, pp. 221-234.

²ここに挙げた資料以外にも、アショーカ王の弟に関する資料が存在している。例えば *Mahāvamsa* には、やや内容は異なるが、仏教出家者の生活形態についてのアショーカとの議論および出家までの様子が記されている(5, 154-172)。Cf. *Mahāvamsa*, edited by W. Geiger, London: Pali Text Society, 1958. これらの資料については以下の研究を参照。Cf. 山崎元一 『アショーカ王伝説の研究』 東京：春秋社, 1979, pp. 233-239.

<略号>

CN = *Divyāvadāna*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil

V = *Divyāvadāna*, edited by P. L. Vaidya

M = *Aśokāvadāna*, edited by S. K. Mukhopadhyaya

BHSG, BHSD = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, volumes I-II, edited by Franklin Edgerton, London, 1953 (reprint, Kyoto: Rinsen Book co., 1985).

PED = *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, edited by T. W. Rhys Davids and William Stede, Oxford, 1921-1925 (reprint 1999).

Speyer = J. S. Speyer, "Critical Remarks on the Text of the *Divyāvadāna*," *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 16, 1902, pp. 103-130 and pp. 340-361.

『王伝』 = 『阿育王伝』

『王経』 = 『阿育王経』

訳文中に太字で記した [] 内の数字は CN の頁数を指す。また、脚註に引用する *Divyāvadāna* のサンスクリット文については、翻訳に影響する重要な相違が存在しない限り、CN の文のみを挙げる。尚、偈文に付した番号は V に拠っている。

<王弟ヴィータショーカの物語>

アショーカ王が世尊の教えに対する信を獲得した時、彼 (= アショーカ) により八万四千の仏塔³が建立され、また、五年一大会 (pañcavārsika)⁴が開催された。〔その際、〕食事をふるまわれた比丘達は 30 万人であったが、内、10 万人は阿羅漢であり、20 万人は有学 (śaikṣa) と善良なる俗人 (pṛthagjana-kalyāṇaka)⁵であった。〔そして、〕海

³原語は dharmarājikā である。本来、「法王の〔もの〕」と訳すべきところであるが、*Divyāvadāna* の第 26 章においては、「dharmarājikā を建立した」という文句の直後に、同じ内容を「stūpa を建立した」という文句でもって言い換えている箇所が存在する (CN, p. 381, ll. 16-22, ll. 23-27)。従って、ここでの dharmarājikā は具体的には stūpa を指すと考えられるため、本文中では「仏塔」と訳した。尚、dharmarājikā という語が「仏塔」の呼称として用いられる理由に関しては、以下の研究に言及されている。Cf. 杉本卓洲『インド仏塔の研究 - 仏塔崇拜の生成と基盤 -』京都: 平楽寺書店, 1984, pp. 242-243.

⁴サンガへ布施を行うために、王などによって五年に一度開催される仏教行事。「五年大会」・「般遮于瑟会」等とも漢訳される。Cf. 『望月仏教大辞典』(改定版) 東京: 世界聖典刊行協会, 1974, p. 4249; Max Deeg, *Origins and Development of the Buddhist Pañcavārsika, Part I: India and Central Asia, Saṃbhāṣā*, 15(1995), pp. 67-90; *Origins and Development of the Buddhist Pañcavārsika, Part II: China, Saṃbhāṣā*, 18(1997), pp. 63-96. 尚、アショーカが開催したこの五年一大会においては、サンガに対して食事と衣が布施されている。その詳細は *Divyāvadāna* の第 27 章 (CN, p. 398, l. 19- p. 405, l. 15) において記載される。

⁵PED の puthujjana-kalyāṇaka の項には、"an ordinary man striving after his spiritual

に至るまでの⁶大地における人々は、尚一層、世尊の教えに対して浄信をいただいた⁷。〔一方、〕彼（＝アショーカ）の弟はヴィータショーカという名であり、外道の者に対して浄信をいただいていた⁸。外道の者達によって誑かされた彼（＝ヴィータショーカ）は「仏弟子の沙門達には解脱は存在しない。」と〔語り、また〕「なぜなら、その者（＝仏弟子）達は安楽を喜び、疲労を怖れるからだ。」と〔語った⁹〕。

そこで、アショーカ王は語った。

「ヴィータショーカよ。お前は抛り所でないもの¹⁰に対して浄信を起こしてはならない¹¹。そうではなく、仏・法・サンガに対して浄信を起こせ。これが〔正しい〕抛り所に捧げられた浄信である¹²。」と。

good.”(p.466b) と説明され、BHS D では、“a good kind of ordinary man, one striving for religious improvement.”(p. 353a) と説明される。

⁶原文では、samudrāyāṃ(CN p. 419, l. 18) である。CN の脚註(5)にはāsamudrāyāṃという読みが想定されており、M(p. 56, l. 5)はその読み採用している。また、V(p. 272, l. 4)では(sa)samudrāyāṃという読みを記している。漢訳には該当する文句が存在しないが、*Divyāvadāna* 第26章に、... āsamudrāyāṃ pṛthivyāṃ hīnotkṛṣṭamadyameṣu nagareṣu, yatra koṭiḥ paripūryate tatra dharmarājikāṃ pratiṣṭhāpayitavyam [CN p. 381, ll. 4-6] (=... 海に至るまでの大地における、〔人口あるいは戸数〕一億を満す小・大・中の諸都市、そこに仏塔を建立すべし。)という文句が見える。従って、Vの(sa)samudrāyāṃ (=海を含め...)よりも、CNとMのāsamudrāyāṃ (=海に至るまでの...)を採用すべきであろう。尚、このāsamudra-という語は、他にも二箇所見出せる。Cf. CN p. 364, l. 9; p. 372, l. 15.

⁷原文は bhagavacchāsane 'bhiprasannāḥ / (CN p. 419, l. 19) である。本来は「世尊の教えに対して〔心が〕浄らかとなった」と訳すべきであろう。abhiprasanna は pra sad の派生語であるが、もともと pra sad には信の意味は無い(藤田宏達「原始仏教における信の形態」『北海道大学文学部紀要』6 (1957), pp. 67-110, 特に, p. 83.)。しかし、仏教における信が心の澄浄を内容とする点から、仏典では pra sad の派生語に対し信の意味を加味して用いられることがある。また、śraddhā の訳語である「信」と区別するために、pra sad の派生語に対しては「浄信」という訳語を用いることも珍しくない。従って、便宜上、本稿においても pra sad の派生語に対して「浄信」という訳語を用いることにする。

⁸仏典では、ブツダや法・僧といった対象以外に、バラモンやニルグラントなどを対象として pra sad の派生語を使用することがある。Cf. 藤田, 前掲論文, pp. 85, 88.

⁹原文は sa tīrthayair vigrāhitāḥ, nāsti śramaṇaśākyaputriyāṇāṃ mokṣa iti, ete hi sukhābhiratāḥ parikhedabhiravaś ceti / (CN p. 419, ll. 20-22) である。漢訳(『王伝』106a21-24; 『王経』141b10-12)は、ともにこれらをヴィータショーカの発言とする。

¹⁰原文では anāyatane(CN p. 419, l. 23) である。M だけは hīnāyatane(p. 56, l. 10) とする。漢訳では、『王伝』が「不可信處」(106a25) とし、『王経』も「非處」(141b13) とし CN に一致している。

¹¹V は mā tvam anāyatane 'prasādam utpādaya(p. 272, l. 7) とするが、これでは「抛り所でないものに対して浄信ならざるものを起こすな」つまり「... 浄信を起こせ」という意味となる。これは前後の文脈と一致しない。

¹²原文は, eṣa āyatanagataḥ prasāda iti / (CN p. 419, l. 24) である。BHS D(p. 101b)はこの箇

さて、或る時、アショーカ王は狩りをしに〔ヴィータショーカと共に¹³〕外出した。その森¹⁴において、ヴィータショーカは、五熱の行¹⁵を実践している苦行者を見た。彼（＝苦行者）は、実に、痛々しい苦行を最上のものであると〔誤〕解していた¹⁶。彼（＝ヴィータショーカ）は〔苦行者に〕近づいて、足下に礼拝した後、その苦行者に質問した。

「尊者よ。〔420〕あなたは、この森（araṇya）においてどれ程の間、住しておられるのですか。」

彼（＝苦行者）は答えた。

「十二年間である。」

ヴィータショーカは尋ねた。

「あなたの食物は何ですか。」

その苦行者は答えた。

「果実と根である。」

〔ヴィータショーカは尋ねた。〕

所を引用し、”... *this is favor bestowed on a worthy object*”と訳している。

¹³『王伝』の「阿恕伽王曾於一時共宿大哆出行遊獵。」(106a27)という記述により補足。『王伝』では王弟の名は「宿大哆」である。

¹⁴原語は araṇya(CN p. 419, l. 25) である。パーリ語形は arañña であり、PED は”remoteness”, ”wilderness or forest”, 更に、”everyplace, except a village and the approach thereto, is arañña.”という説明を記す (p. 76)。『王経』は「阿育王弟於彼山中見一仙人五熱炙身。」(141b15)と記し、「山中」としている。PED の定義のように「村落でないところ」を araṇya と呼ぶことがあるため、「山中」と訳すことも可能であろう。しかし、前後の文脈からは特に「山中」と訳す必要性は見出せない。ここでは、「山中」も含め狩猟対象の獣が住する場所を指すものとして「森」と訳す。尚、このような、王が狩猟を行う場所としての araṇya については、カウティリヤの『実利論』(Arthaśāstra) にも王の狩猟場としての「野獣林」(mṛgāraṇya) という語が見られる (Kangle edition, I.21.23)。Cf. 山崎元一「古代インドの森林と林住族」『東洋学報』第64巻第3・4号, pp. 135-163, 特に p. 143。また、律典等の記述に基づくならば、村落から数百メートルないし一キロメートル以上離れたところがアランヤである。Cf. 佐々木閑「アランヤの空間定義」『神子上恵生教授頌寿記念論集 インド哲学佛教思想論集』京都: 永田文昌堂, 2004, pp. 127-146。

¹⁵Divyāvadāna 第26章に苦行者達の実践の様子が記されるが (CN p. 350, l. 6), そこにおいてもこの五熱の行が挙がっている。具体的には、日中に自分の周囲四箇所に熱源 (= 四つの火) を置き、その中心に坐すことである。五つ目の熱源は直射日光である。Cf. *Manusmṛti* の第6章第23偈 (*Manusmṛti with the Manubhāṣya of Medhātithi*, ed by Ganganath Jha, vol. 1, Delhi: Motilal Banarsidass, 1999, p. 503.22-23)。

¹⁶原文は sa cakaṣṭatapaḥsārasaṃjñī / (CN p. 419, l. 26) である。saṃjñīn については、BHSD(pp. 552-553) の (4) に”having a false”, ”wrong idea”という意味が挙がる。更に、その中で、teṣu ca sārāsaṃjñīno bhavanti(LV 249.18) という事例が挙げられ、”and in regard to them falsely imagine that they are the chiefthing”と訳されているので、これを参考にして訳した。

「着る物は何ですか。」

〔苦行者は答えた。〕

「ダルバ〔草〕を衣としている。」

〔ヴィータショーカは尋ねた。〕

「寝床は何ですか。」

〔苦行者は答えた。〕

「草の敷物である。」

ヴィータショーカは尋ねた。

「尊者よ。如何なる苦が〔あなたを〕さいなむのですか。」

苦行者は答えた。

「これらの鹿達は決まった時期に交尾するが、鹿達の交尾を見る時に、私は貪欲に焦がされる。」

ヴィータショーカは語った。

「この御方の痛ましい苦行によって¹⁷〔すら〕、今なお、貪欲は〔この御方を〕悩ませている¹⁸。ましてや、仏弟子の沙門達は十分に整った座具と臥具を楽しんでいる。どうして、この者（＝仏弟子）達が貪欲を排除できようか。」

そして、〔ヴィータショーカは〕語った。

「この世において、ひと気のないこの痛ましい森（vana）に住しつつ、風雨と〔植物の〕根を食する、時を経た苦行者によって貪欲が征圧されていないのに、この世において、もしも、バターとともに、たくさんの細切れ肉の入った、高級な凝乳で飾られた食べ物を食べながら、仏弟子達に感官の抑止が生じるなら、ヴィンドウヤ〔山〕が海に浮かぶであろう。」//1//

〔また、ヴィータショーカは語った。¹⁹〕

「アショーカ王はすっかりだまされてしまっている。だから、仏弟子の沙門達に諸々の供養を行っているのだ。」

すると、この発言を聞いて、方便に通暁しているアショーカは大臣達に語った。

¹⁷CN は、asya kaṣṭhena tapasā ... (p. 420, ll. 6-7)であるが、Mのみは、asya kaṣṭhena tapasā [vartamānasya]...(p. 57, l. 3)「痛ましい苦行を伴って〔暮らす〕この御方にとって...」とする。

¹⁸CNの本文中では、rāgo 'dyāpi na bādhyate とされているが(CN p. 420, l. 7.)、CNの脚註(1)には複数の写本で na が欠落していること、そして、bādhyate と記す写本(A)が存在することが記されている。Speyer氏は、rāgo 'dyāpi bādhyate という写本(A)の読みに問題が無く、これを採用すべきことを指摘する(Speyer p. 351)。本稿では、氏の指摘に従い、rāgo 'dyāpi bādhyate という読みに基づいて訳す。

¹⁹『王経』の「阿育王弟復更説言。」(141c1)という記述により補足。

「このヴィータショーカは外道の者に対して浄信をいただいているが、方便を用いて世尊の教えに対して浄信をいだかせねばならない。」

大臣達は尋ねた。

「陛下、何かご命令でしょうか。」

王は語った。

「私が王の装飾品である王冠と冠帯²⁰とをはずして浴室に入ったら、お前達は方便を用いてヴィータショーカに王冠と冠帯とを身につけさせ、獅子座に坐らせよ。」

〔大臣達は語った。〕

「その通りに致しましょう。」と。

さて、王は王の装飾品である王冠と冠帯とをはずしてから浴室に入った。それから、大臣達はヴィータショーカに告げた。

「アショーカ王がご逝去なさって後は、あなたが王となられるでしょう。ちょっとした間²¹、この王の装飾品である最勝の王冠そして冠帯を²²〔あなたに²³〕お付けして、獅子座に坐らせてみましょう。あなたがお似合いになるかどうか〔判りませんから。〕と。

その時、彼ら（＝大臣達）は、〔ヴィータショーカに〕飾りの付いた王冠と冠帯とを身につけさせ、獅子座に坐らせると、〔アショーカ〕王に報告した。すると、アショーカ王はヴィータショーカが王の装飾品である王冠と冠帯とを身につけ、獅子座に坐っているのを眺めてから語った。

「私はまだ生きているのに、お前は王となったのか。」

それから、王は叫んだ。

「誰かここに居るか！」

[421] すると間もなく、黒衣に身をつつみ、髪を垂らし、手に鈴を持った処刑人²⁴達が〔やって来て〕王の足下に平伏してから語った。

「陛下、何かご命令でしょうか。」

²⁰原文は *rājālaṃkāraṃ mauliṃ paṭṭaṃ* (CN p. 420, l. 19) である。『王伝』では「天冠纒絡服飾」(106b10)、『王経』では「天冠及衣服等」(141b6) としている。

²¹原文の *tāvāt* (CN p. 420, l. 24) をこのように訳した。漢訳では『王伝』が「今試著是天冠纒絡。」(106b11) とし、『王経』も「... 今者試著天冠被天衣服及登王座。」(141c10) とし、「一時的に」というニュアンスを表現している。

²²CN では *pravaramauliṃ paṭṭaṃ* (p. 420, l. 26)。M だけが *pravaramauli-paṭṭaṃ* と訂正している (p. 58, l. 1)。M には写本の支持が記されていないので、ここでは CN に従う。

²³M も目的語として [tvām] を補っている (p. 58, l. 2)。

²⁴ここで「処刑人」と訳した語は *badhyaghātaka-* (CN p. 421, l. 1) であるが、『王伝』は「真陀羅」(106b15) すなわち「チャンダーラ」とする。

王は語った。

「私はヴィータショーカを見限った。」と。

そこで〔処刑人は〕ヴィータショーカに語った。

「剣持つ処刑人である我々によって、お前は包囲されているぞ。」と。

すると、大臣達は王の足下に平伏してから語った。

「陛下、ヴィータショーカをお赦し下さい。この方は陛下の弟君なのですぞ。」

すると、王は宣告した。

「七日間、私はこの者を赦免しよう。また、この者は弟である。私は弟を愛する故に、この者に七日間、王位を与えよう。」

さて、数百の楽器が演奏され、〔ヴィータショーカは〕歓呼の声の数々により賞讃された。また、数十万の人々によって合掌され、数百人の女性達によって取り巻かれた。しかし、門²⁵のところには処刑人達が立っており、一日が終わった時に、ヴィータショーカの面前に立って、〔以下のように〕告げるのである。

「ヴィータショーカよ。一日が過ぎたぞ。残りは六日だ²⁶。」

二日目においても、同様であった。 - この間仔細〔省略〕 - , 七日目に、王の装飾品で飾り立てられたヴィータショーカはアショーカ王の側へ連行された。すると、アショーカ王は告げた。

「ヴィータショーカよ。どうだ。素晴らしい歌、素晴らしい踊り、素晴らしい演奏であったろう。」と。

ヴィータショーカは答えた。

「私には、何も見えませんでしたし、何も聞こえませんでした。」と。

そして、〔ヴィータショーカは〕語った。

「歌を聞き、踊りを眺めた者ならば、あるいは、佳味の数々を味わった者ならば、その者はあなたに感想を語り得るのだらうけれど²⁷...。」 //2//

王は尋ねた。

「ヴィータショーカよ。私は七日の間、この王位をお前に与えのだぞ。数百の楽器が演奏されたし、また、歓呼の声の数々によって〔お前は〕賞讃され、数百の合掌が行われた。

²⁵原文では dvāri (CN p. 421, l. 9) である。この dvāri が城の内外を隔てる「城門」を指すのか、城内の建物の「門」を指すのか、あるいは「部屋の扉」を指すのかは不明。『王伝』は「在四門下」(106b21) と記すので、ここでは仮に「城門」を指すと解して訳した。

²⁶『王伝』は「一日已過餘六日在。屠裂汝身分肢體。絶斷汝命。將亡不遠。」(106b22-23) とし、処刑の詳細が語られたことを記す。

²⁷原文では brūyāt (CN p. 421, l. 17) . しかし、V のみは bhūyāt (p. 273, l. 11) とする。

また、数百の女性達によって仕えられた。〔にも関わらず、〕お前は どうして『私には何も見えませんでしたし、何も聞こえませんでした』と語るのか。」

ヴィータショーカは答えた。

「死に繋がれた思いの故に、私は踊りを見ず、また王よ。歌声を聞かなかった。私は香りの数々を嗅がなかったし、今日、私は佳味の数々を全く知覚しなかった。私は黄金や宝石やネックレスや肢体によって引き起こされる感触を感じず、女性達の集団を〔意識しなかった²⁸〕。

女性の踊り・歌・宮殿と臥具の数々・座具における作法・若さ・美貌・幸運、そして、多種の宝石を有する大地は、喜ばしくはなく、空しい。王よ。私には素晴らしいベッド〔すら〕安楽ではないのだ。門のところに立つ黒衣を纏う処刑人達を見たからである。

[422] 実に、黒衣を纏う者の恐ろしい鈴の音を聞いてからは、大地の主 (= 王) よ。私には、死に由来するすさまじい恐怖が生じた。

死という槍で取り囲まれた私は、至高の歌を聞かなかった。そして、王よ。私は踊りを見なかった。また、食欲〔も湧か〕なかった²⁹。

死の炎に捕らえられた私には眠ることすら存在しなかった。死ぬことだけを考えつつ、私の全ての夜は過ぎ去った。」 //3-7//

王は語った。

「ヴィータショーカよ。まさかお前は、一度の生涯の死に対する恐怖の故に、王としての幸福を得て〔も〕、お前に喜びが生じしなかったというのが³⁰。ましてや、比丘達は百の生涯の死に対する恐怖にさいなまれ、あらゆる再生処と〔それらに〕付随した苦しみの数々を見ているのだ。先ず、地獄においては、身体に対してなされる苦痛と火の燃焼による苦しみが〔存在する〕。畜生達の内には、相互に喰らい合う恐怖による苦しみが〔存在する〕。餓鬼達の内には、飢えと渇きによる苦しみが〔存在する〕。人間達の内には、〔欲望の対象を〕追求する行動による苦しみが〔存在する〕。神々の内には、死と〔他の

²⁸原文は samūho nārīṇāṃ maraṇaparibaddhena manasā //(CN p. 421, l. 25) である。『王経』が「思惟懼死故 不知如此事」(142a6) と記すことにより補足した。

²⁹原文は na ca bhoktuṃ manaḥspṛhā(CN p. 422, l. 4) である。『王経』では、ここまでをまとめて「不知妙五欲」(142a11) と記す。

³⁰原文は mā tāvat tavaikajanmikasya maraṇabhayāt tava rājaśriyaṃ prāpya harṣo notpannaḥ //(CN p. 422, ll. 7-8) である。BHS 42.15 において、「驚き」を示す mā tāvat の用法について説明されるが、その用例の一つとしてこの箇所が言及され、"you don't mean to say that thru fear of death for you in one single life you, having obtained royal majesty, felt no joy?" という訳が付されている。

境涯への〕転落と破滅による苦しみが〔存在する〕。三界³¹は、以上の五つの苦しみと結びついている。身体と精神とに属する苦しみの数々によって打ちのめされた者達は、諸蘊(=五蘊)を処刑人達³²であると見る。諸処³³を廃村であると〔見る〕。諸境³⁴を盗賊であると〔見る〕。そして、三界に属するもの全てを、無常性という火によって燃えていると見るのである。如何にして彼ら(=比丘達)に諸々の貪欲が生起しようか。」
また、〔アショーカは〕語った。

「心における意に適った諸々の対象によって、絶えず焦がされつつあるにも関わらず、まさかお前は、一度の生涯の死に対する恐怖の故に、喜びが生起しないというのか³⁵。

ましてや、百の生涯に渡る、未来〔世〕の死に対する恐怖を考察しつつある比丘達にとって、食事等についての喜びが心の内に生起しようか。

また、身体を処刑人や敵に似たものとして、また、燃焼する住居のようなものとして〔見る者達〕、諸存在を無常なものとする者達、解脱に心が向かった彼らにとって、衣服・臥具・座具・食事等が、執着を生起させ得るであろうか。

また、あたかも蓮華の花弁から水滴が〔離れる〕ように、あらゆる楽しみ of 基体に対して心が離れる者達、解脱を目的とし〔未来世の〕生涯から顔を背ける彼らがどうして解脱せぬであろうか。」//8-11//

[423] アショーカ王による方便によって、ヴィータショーカは世尊の教えに対して浄信をいただいた。〔そして〕彼(=ヴィータショーカ)は合掌して語った。

「陛下。今、私は、如来・阿羅漢・正等覺者たる、かの世尊に帰依します。また、法と比丘サンガに〔帰依します〕。」と。

³¹trailokyam(CN p. 422, ll. 13-14) は、直後に後続する文章において traidhātukam(CN p. 422, l. 16) という語でもって言い換えられている。従って、「無色界・色界・欲界」を指すと考えられる。

³²原文は badhakabhūtān skandhān paśyanti(p. 422, ll. 14-15) である。『王伝』は、ここでも「処刑人(badhaka-)」の語を「五陰是真陀羅。」(106c7) と記し「チャンダール」にしている。『王経』は「処刑人」と対応する語を出さず、「觀此五陰無常苦空無我不實。」(142a21) と記す。

³³原文では āyatanāni(CN p. 422, l. 15) である。『王伝』は「六情如空聚。」(106c7) と記し「六感官」とする。

³⁴原文では viṣayāni(CN p. 422, ll. 15-16) である。上記の āyatanāni を「六感官」と解釈するなら「六感官の対象」となるが、『王伝』は「五塵如怨賊。」(106c7) と記しており、「五感官の対象(=色・声・香・味・触)」とする。

³⁵原文は mā tāvad ekajanmikasya maraṇabhayāt tava na jāyate harṣaḥ / manasi viṣayair manoḥnāiḥ satataṃ khalu paśyamānasya //(CN p. 422, ll. 18-19) である。但し、V のみ d 句の paśyamānasya を paśyamānasya とする (p. 274, l. 5)。

また、〔ヴィータショーカは〕語った。

「開いたばかりの無垢なる蓮華に似た眼を有し、賢者と神と人間によって尊敬された³⁶勝者 (= ブッダ) に、今、私は帰依します。また、貪欲を離れたサンガに³⁷〔帰依します〕。」と。 //12//

その時、アショーカ王はヴィータショーカの首を抱きしめてから語った。

「私はお前を見限ったのではない。そうではなく、ブッダの教えに対して浄信をいだかせるために、この方便をお前に示したのだ。」

以後、ヴィータショーカは香と花と輪飾り等と楽団とともに世尊の諸々のチャイティヤを表敬し、また、正しき法を聴聞し、そして、サンガに諸々の供養を行った。

〔ある時、〕彼 (= ヴィータショーカ) はクルクタ・アーラーマ (kurkuṭārāma)³⁸〔という名の寺院〕へ行った。そこには、六神通を具えた阿羅漢であるヤシャス (Yaśas)³⁹ という名の上座が〔居た〕。彼 (= ヴィータショーカ) は法を聴聞するために、彼 (= ヤシャス) の面前に坐した。すると、上座は〔ヴィータショーカに対する〕観察をなし始めた。〔その結果、〕ヴィータショーカが〔阿羅漢になる〕原因を積集し終え、この生涯を最後とする者⁴⁰であり、他ならぬその身体によって阿羅漢に達するであろうことを彼は見て取った。彼 (= ヤシャス) は、彼 (= ヴィータショーカ) に出家を講える言葉を語った。それを聞いたので、彼 (= ヴィータショーカ) には〔以下の〕願望が生起した。
<私は世尊の教えのもとで出家したい。>

それから、〔ヴィータショーカは〕立ち上がって合掌すると上座に語った。

「私は見事に説かれた法と律のもとで、出家し、受戒し、比丘になりたいのです⁴¹。私は

³⁶原文では budhavibudhamanujamahitaṃ (CN p. 423, l. 6) であるが、『王経』は「天人所歸依」(142b9) と記す。

³⁷原文では「法帰依」が記されない。『王伝』には対応偈を欠くが、『王経』は「無漏法及僧」(142b9) とし「法への帰依」を記す。

³⁸*Divyāvadāna* 中のアショーカ王にまつわる四章 (第 26~29 章) において度々登場する、パータリプトラに在る寺院である。アショーカ王の息子クナーラも、王と共にこの寺院へ参詣して法を聴聞しており (CN p. 406, ll. 20-21), アショーカが晩年に行う布施もこの寺院へ届けられる (CN p. 430, ll. 13-14)。『王伝』は「鶏頭摩寺」(106c18), 『王経』は「鶏寺」(142b14) と訳す。

³⁹クルクタ・アーラーマに居る比丘で、『王伝』では「夜奢」あるいは「夜舎」、『王経』では「耶舎」と音訳される。アショーカ王との深い関わりが指摘されている。Cf. 山崎元一『アショーカ王伝説の研究』東京: 春秋社, 1979, pp. 192-196. *Divyāvadāna* 中の四章 (第 26 章-第 29 章) において、クルクタ・アーラーマはこの人物とペアで言及されることが多い。

⁴⁰原語は caramabhavika (CN p. 423, l. 14) である。

⁴¹labheyāhaṃ svākhyāte dharmavinaye pravrajyām upasampadaṃ bhikṣubhāvam ... (CN p, 423,

あなたの側で梵行を实践したいのです。」

上座は語った。

「息子よ。アショーカ王を同意させなさい。」

それから、ヴィータショーカはアショーカ王のもとに近づき、合掌して語った。

「陛下、私に許可をお与え下さい。見事に説かれた法と律とに対する、実に真正なる信にもとづき、私は家から家無き状態へと出離したいのです。」

また〔ヴィータショーカは〕語った。

「鉤棒を欠く象のように、〔私は〕正気を失っていた。〔しかし〕あなたの知性という卓越した鉤棒によって私は迷乱から抜け出した。〔今や〕私は、ブッダの諸々の教説によって、規範通り〔の者〕となっている。しかし、諸王の主よ。あなたは私に、更に勝れた一つのことを教示し得る⁴²。世間の中の最勝の光（＝ブッダ）の勝れた教えのもとで、〔私に、出家という〕素晴らしい徴を保持させよ⁴³。」 //13//

そして、〔それを〕聞いたので、王は喉を涙で濡らし、ヴィータショーカの首を抱きしめてから語った。

[424]「ヴィータショーカよ。そのような決意は不要だ。それに、出家というものは、暮らす場所が賤民⁴⁴と近いし、着る物といえば糞掃衣⁴⁵であるし、従者は居ないし、食事は他人の家において施されたものであるし、臥具・座具は樹木の根もとに草を敷いたもの〔もしくは〕羽毛を敷いたものである。それに、病気の際にも医薬品は十分に入手できず、また、〔病気のための〕服用物は陳棄葉⁴⁶である。更に、お前はとても繊細で、寒

ll. 17-18) この文句は平岡聡氏によって、説一切有部系文献に見られる定型句として指摘されている。Cf. 平岡聡『説話の考古学 - インド仏教説話に秘められた思想 -』東京: 大蔵出版, 2002, pp.169-170, pp. 197-198.

⁴²原文は *ekaṃ tvam arhasi me varaṃ pradarśituṃ tvam pārthivānāṃ pate* (CN p. 423, ll. 26-27) である。tvamが二度記されていて不自然であり、韻律的にも問題がある。写本の支持は無いが、CNの脚註 (p. 423, n. 5)での訂正に従い、*ekaṃ tv arhasi ...* として読む。尚、Mもこの読みを採用する (p. 62, 10)。

⁴³原文では *liṅgaṃ śubhaṃ dhārayet* (CN p. 423, l. 28) である。ここではCNを採用して訳したが、Mは *dhāraye* に訂正している (p. 62, l. 11)。尚、『王伝』の「重垂哀愍聽我於彼大明之所修出家法。」(106c26)という記述や、『王経』の「王為地中主 當聽我出家」(142b25)という記述から、*liṅgaṃ śubhaṃ* は「出家すること」を指すと考えられる

⁴⁴原語は *vaivarṇika*(CN p. 424, l. 1) である。

⁴⁵原語は *pāṃśukūla*(CN p. 424, l. 2) 「塵埃の堆積〔から集めて作った衣〕」。

⁴⁶『王伝』も「病則服於陳棄之藥」(107a1)と記す。原文では *pūtimuktaṃ*(CN p. 424, l. 4) であるが、Vは *pūtimūtraṃ*(p. 275, l. 8) としている。BHSDによれば、これらはともにパーリ語の *pūtimutta* に対応する語であるが、*pūtimukta* が正しい語形であり、「*medical decoction, of herbs*」〔(薬草の)煎じ薬〕という意味であるとする (p. 350)。尚、Speyerは *pūti śuktaṃ* = "putrid and vapid" (p. 352)と訂正

さ・暑さ・飢え・渇きの苦に耐えられない。落ち着け。翻意せよ。」
 ヴィータショーカは語った。

「陛下、私は決して〔欲望の〕対象を渴望したり、怠惰に負けて、そのこと（＝出家）を考えているわけではない⁴⁷。〔また、〕敵により力を剥奪された〔者〕としてでなく、財産に困窮した〔者〕としてでは全くなくして、出家になろうと望むのである。この世間が苦にさいなまれ、死神に愛され、災厄に包囲されているのを見る故に、〔再度の〕生涯を恐怖する私は、吉祥にして無畏なる道を歩むことを決意したのだ。」//14//

〔それを〕聞いたので、アショーカ王はすぐに泣き始めた。すると、ヴィータショーカは王を慰めながら語った。

「輪廻という不安定な輿に乗ったからには、生類達にとって、落下（＝死ぬこと）は必定である。全ての者には全ての者との別離が〔存在する〕というのに、どうして、あなたは動揺なさるのか。」//15//

王は語った。

「ヴィータショーカよ。まずは乞食についての訓練をなせ。⁴⁸」

王宮内の樹木に囲まれた場所に、彼（＝ヴィータショーカ）の草の敷物が広げられ、そして、この者（＝ヴィータショーカ）に対して、食事が与えられた。〔また、〕彼（＝ヴィータショーカ）は後宮を歩き回ると、立派な食事を得た⁴⁹。すると、王は後宮の女性達に命じた。

「お前達は、この者（＝ヴィータショーカ）に、出家者にふさわしい食事を与えよ。」と。

さて、彼は悪臭のする傷んだ飯を得ると、それらを食べ始めた。〔それを〕見たので、アショーカ王は〔訓練を〕止めさせて後、許可を与えた。

している。

⁴⁷原文は *naiva hi jāne taṃ nūnaṃ viṣayatṛṣito 'nāyāsavihataḥ* / (CN p. 424, l. 7) であり、これに従って訳したが、Speyer は、韻律の点から以下のように訂正している。 *naivāhaṃ jātu nūnaṃ viṣayatṛṣito nāyāsavihataḥ* / = forsooth I do not at all crave for worldly pleasures nor do I allow myself to be checked by toil (pp. 352-353).

⁴⁸『王経』ではこの記述の直後に「然後乃得出家。」（その後に出家しなさい）(142c10) という文言が続く。

⁴⁹原文では *mahārhaṃ cāhāraṃ na labhate* (CN p. 424, l. 18) 「立派な食事を得なかった」とされるが、漢訳二本は何れも立派な食事を入手できたと記す。『王伝』「使從宮人次第乞食宮人皆與美好飲食。」(107a10); 『王経』「毘多輪柯。即便持鉢行入宮内。種種上食而便得之。」(142c11-12)。後続するアショーカの行動から、「立派な食事を得た」とする方が筋が通るので、ここでは *na* を削除して読む。尚、M(p. 63, l. 11) も *na* を削除している。

「出家せよ。しかし、出家した後、姿を見せるのだぞ。」

さて、彼(=ヴィータショーカ)はクルクタ・アーラーマへ向かったが、彼には〔或る〕考えが浮かんだ。

<もしもここで私が出家すれば、私は〔人々に〕取り囲まれてしまうだろう⁵⁰。>

そこで、〔ヴィータショーカは〕ヴィデー八国に行ってから出家した。それから、阿羅漢となるまでの間、彼による〔出家生活〕適切であった⁵¹。

さて、阿羅漢となって後、解脱の喜びと安楽を経験したヴィータショーカ具寿⁵²は以下のように考えた。

<私には、アショーカ王との昔の〔約束〕が確かに存在する。>

〔そこで、〕アショーカ王の宮殿の門に到着した⁵³。それから、〔ヴィータショーカは〕門番に語った。

「行きなさい。〔そして〕アショーカ王に報告しなさい。[425] 『ヴィータショーカが門のところに居り、陛下との面会を希望しております』と。」

すると、門番はアショーカ王のもとに行き報告した。

「陛下、おめでとうございます。ヴィータショーカ様がおいでです。陛下との面会を希望し門のところに留まっておられます。」

⁵⁰原文は *yadiha pravrajisyāmy ākirṇo bhaviṣyāmi* / (CN p. 424, ll. 23-24) である。修行の妨げとなる状態を指すと考えられる。漢訳もそのような状態を示唆している。『王伝』「若我於此出家必多妨闡。」(107a15); 『王経』「我若於此出家。人物亂我不得修道。」(142c19)。

⁵¹原文は *tatas tena yujyatā yāvad arhattvaṃ prāptam* / (CN p. 424, ll. 24-25) である。yujyatāの形容する語が見あたらないので、pravrajyā「出家生活」を補って訳す。漢訳は以下の通り。『王伝』「精勤得阿羅漢道...」(107a16); 『王経』「思惟精進得阿羅漢果。」(142c21)。

⁵²「具寿」と訳した *āyusmat* という語について、中村元氏は、もともと *āyusmat* は「長寿なるもの」・「生命に富む者」という意味であり、しばしば年長者が年下の者に呼ぶ場合に「若い人」を意味して *āyusmat* が使用されることがあること、また、仏教教団では、入団して間もない新参の者に対して呼びかける時にこの呼称が使用される場合があることを指摘する。ヴィータショーカに関しては「若い人」と訳すべきか「新参者」として訳すべきか判断できない。従って仮に「具寿」のまま訳すことにする。Cf. 中村元「若き人 *āyusmat*」『印度学仏教学研究』32-1,1983, pp. 62-66。

⁵³原文では、*asti khalu me / pūrvam rājño 'śokasya gṛhadvāram anuprāptaḥ* / (CN p. 424, ll. 27-28) となっている。Speyer は、この文を、*asti khalu me pūrvam rājño 'śokasya < pratijñātaṃ rājño 'śokasya > gṛhadvāram anuprāptam* (p. 353) として、<>内の部分を補って訂正している。Speyer 氏は、オリジナルのテキストにおいて *rājño 'śokasya* という文句が繰り返されていたために、書写者が<>内の部分を見落としたと推測する。漢訳では、『王伝』の「... 便生心念。昔阿育王與我妻言。若出家者必來見我今宜往見。」(107a16-18) という記述、また、『王経』の「復思惟言。昔與王約。出家之後恒來見王。我於今者應滿本約。」(142c22-23) という記述が、Speyer 氏の訂正を支持しているため、氏の訂正したテキストに従って読む。

すると、王は命令した。

「行け。急いで中に入れよ。」と。

さて、ヴィータショーカは王宮に入った。そして、アショーカ王は〔ヴィータショーカを〕見ると、獅子座から立ち上がり、根もとを切られた樹木の如くに、身体全体でもって平伏すると⁵⁴、ヴィータショーカ具寿を眺めつつ、泣きながら語った。

「私を見ても、生類達が会見した時に常とする動揺に至らぬようである〔からには、お前が〕独住という行為によって得られた甚だ美味なる智慧の味を楽しんでいるのだと私は思う。」//16//

さて、アショーカ王にはラーダグプタという名の第一の大臣が居た。彼（＝ラーダグプタ）は〔以下のように〕観察した。

<ヴィータショーカ具寿の衣は糞掃衣であり、鉢は土製であり、- この間〔省略〕-、劣ったものと好ましいものを〔分け隔て無く⁵⁵〕食として乞うている。>

〔以上のように〕観察した後、王の足下に平伏すると、合掌して語った。

「陛下、この方は少欲知足であります。この方はきっと、責務を果たした方（＝阿羅漢⁵⁶）なのでしょう。〔陛下は⁵⁷〕お喜びになるべきです。なぜなら、...

乞食によって〔施された〕食べ物を食し、そして、糞掃衣を衣とし、また、樹木の根もとを住処とする人、そのような人にとって、どうして〔阿羅漢であることが〕不確定であろうか⁵⁸。

心は無漏にして広大であり、また、身体は病無く保たれており⁵⁹。自分の望み通

⁵⁴原文は、... sarvaśārīreṇāyusmantam ... (CN p. 425, l. 6) である。しかし、Speyer は、... sarvaśārīreṇ < a pādayor nipaty > ayusmantam ... (p. 353) と訂正するので、これに従って訳す。『王伝』の「五體投地為之作禮。」(107a22) も Speyer の訂正を支持する。

⁵⁵『王伝』の「平等乞食好惡皆受。」(107a28) という記述と、『王経』の「次第乞食麁好俱受心無分別。」(143a7) という記述により補足。

⁵⁶原語は kṛtakaraṇīya (CN p. 425, l. 15) である。PED はこの語のパーリ語形 katakaraṇīya を阿羅漢を形容する文句であると指摘する (p. 181)。

⁵⁷『王経』「王當生歡喜心。」(143a9) に基づき補足。

⁵⁸原文では tasyāniyatam katham (CN p. 425, l. 17) である。ここでは aniyatam が指す内容が不明瞭であるが、直前の散文 niyatam ayam kṛtakaraṇīyo bhaviṣyati (CN p. 425, ll. 14-15) を受ける偈であるので補足した。

⁵⁹原語は upacita (CN p. 425, l. 18) である。PED (p. 140, "conserved (of the body)") により「保たれた」と訳す。

りに暮らしを立てる⁶⁰人、そのような人には、人間界において、常なる喜びがある。」//17-18//

すると〔それを〕聞いたので、心を喜ばせた王は語った。

「王統の継承者(=ヴィータショーカ)が、マウリヤ王統とマガダ市と全ての宝庫を放棄して、尊大・高慢・迷妄・激情⁶¹を捨て去ったのを見たので、
実に、強大である⁶²都市は、〔お前の〕名声によって甚だ高尚となり、浄らかとなったと私は思う。お前は十力の保持者(=ブツダ)の教えを存分に実践せよ。」//19-20//

さて、アショーカ王は両腕で〔ヴィータショーカを〕抱きかかえ、準備されたばかりの座に坐らせた。そして、手ずから、美味なる食事でもって満足させた。〔ヴィータショーカが〕食事を終えて手を洗い、鉢を置いたのを見てから、[426]〔アショーカは〕法の聴聞のためヴィータショーカ具寿の面前に坐った。すると、ヴィータショーカ具寿は法話によって、アショーカ王に対して〔教えを〕開示しつつ語った。

「不放逸⁶³を具えて、王国の支配を行え。王よ。得難き⁶⁴三宝を、常に供養せよ⁶⁵。」
//21//

さて、彼(=ヴィータショーカ)は、法話でもって〔アショーカを〕喜ばせて後、〔王宮を〕出発した。その時、五百人の大臣達に取り囲まれ、数千人の住民達に取り囲まれ、

⁶⁰原文は svacchandato jīvitasādhanam(CN p. 425, l. 20) である。『王経』(143a12) は「正命自活」と記す。

⁶¹「激情」と訳した語は sārambha(CN p. 425, l. 24) である。BHS(p. 593) と PED(p. 706) によって samprambha と見なして訳す。

⁶²原文全体は atyuddhṛtam iva manye yaśasā pūtam puram iva maham ca //(CN p. 425, l. 25) である。「強大」と訳したのは maham である。M だけは、maham を geham に訂正するが、写本の支持は記されていない。maham を先行する puram の形容詞と見なす場合、maham ではなく mahac が期待されるが、BHS 18.60 に類する事例と見なし、中性単数主格と解する。

⁶³原文では apramādyena(CN p. 426, l. 3) である。V(p. 276, l. 24) や M(p. 66, l. 5) が訂正する通り、apramādena が通常知られる形である。BHS も珍しい語形として、この箇所と言及する(p. 49)。

⁶⁴原文では durlabhā trīṇi ratnāni(CN p. 426, l. 4) である。M だけは durlabhatrīṇi(p. 66, l. 6) に訂正する。BHS 8.100 によれば中性複数目的格の語尾として -ā が使用されることは珍しくないようである。

⁶⁵この偈は *Divyāvadāna* の第 27 章 Kunālāvadāna の中で、ウバグブタ上座がアショーカに語る偈と同じものである(CN p. 387, ll. 27-28)。尚、『王経』は、原文と同じく、これら両偈の文言が殆ど一致するが(136a28-29; 143a23-24)、『王伝』では両偈の文言はかなり異なっている(103a1-3; 107b8)。

敬われたアショーカ王は合掌し、ヴィータショーカ具寿に随行し始めた。実に〔大臣達や住民達は〕語るであろう⁶⁶。

「王である兄が今、恭しく、弟に付き従っている。実にこれが、賞讃に値し、眼に見える、出家の果報である。」//22//

それから、ヴィータショーカ具寿は、〔自分を〕眺めている人々全てに対して、自らの美德の数々を示さんがために、神通力によって中空に昇って、前進した⁶⁷。一方、十万の人々に取り囲まれ敬われたアショーカ王は合掌し、視線を中空に向けて、ヴィータショーカ具寿を眺めながら語った。

「親族への愛着を断ち切り、鳥のように〔あなたは〕進む。繁栄に対する欲望⁶⁸という鎖の数々によって繋がれた私達を諫めているかのように。

また、自らを抛り所とし、平静であり、〔自らの〕意のままに実践する者が⁶⁹有する、これなる禅定の果報は、貪欲に眼のくらんだ者達によっては見られない。//23-24//

さらにまた。

実に、繁栄により慢心した、そのような私達は、〔あなたの〕素晴らしい神通力によってたしなめられた。また、智慧による高慢の生起を頭に頂いた〔私達〕は、実に、〔あなたの〕知性によって低頭せしめられた⁷⁰。果報に無知なる心を有する、そのような私達は、〔あなたの〕得たものによって畏怖せしめられた。涙で曇った顔を有する私達は、〔今〕居るところに捨てられた⁷¹。」//25//

⁶⁶原文は *vakṣyati hi*(CN p. 426, l. 8) と記すだけで、主語が不明瞭である。『王伝』も主語が不明瞭である。『王経』は「大臣人民而説偈言」(143a26) と記し、主語を明らかにする。

⁶⁷『王伝』は「我兄昔以多種方便化我令入佛法之中。今當使彼增益信敬。」(107b12-13) と記し、アショーカの信仰を増進させることが目的だったとする。

⁶⁸原文では *śrīrāga*-(CN p. 426, l. 17) である。『王伝』は「我為王位縛 保愛於世事」(107b15) と記しており、内容が詳細である。『王経』は単に「我以貪愛鎖」(143b4) と記すのみである。

⁶⁹原文では *manasamketacāriṇaḥ*(CN p. 426, l. 18)。

⁷⁰原文は *buddhyā khalv api nāmitāḥ śirasitāḥ prajñābhīmānodayam* である (CN p. 426, l. 22)。この中の *śirasitāḥ* は難解である。CN の Index(p. 692) には "exalted(?)" と記されるのでこれに従った。しかし、BHSD はこの偈の a 句や c 句に、*te vāyam* の語が見られることから、この *śirasitāḥ* を *śirasi tāḥ* と分割し、*vāyam* が隠れていることを想定して、*tāḥ* を *te* と読むべきとする (p. 528)。

⁷¹原文は *saṃkṣepeṇa savāṣpadurdinamukhāḥ sthāne 'vimuktā vāyam* //(CN p. 426, l. 24) である。この内、*'vimuktā* をそのまま採用すると「...〔今〕居るところにおいては解放されなかった。」となり、前後の文脈から見ると意味が不明瞭となる。しかし、V(p. 277, l. 11) と M(p. 67, l. 7) は *'vimuktā* を *vimuktā* と読んでいる。*vimuktā* という読みは『王経』における「由汝今捨我」(143b11) (= あなたが私〔達〕を捨てる故に。) という文脈にも合致するので、ここでは *vimuktā* という読みに従う。

そうして、ヴィータショーカ具寿は臥座のために辺境の国々へと去った。

さて、彼は大病を患った。そして〔そのことを〕聞いたので、アショーカ王は医薬品と看護人達を送った。その病気にかかったことにより彼の頭は禿げた⁷²。しかし、病気が治った時には彼の頭には髪が生えた。そして、彼(=アショーカ)は〔今度は〕医者と看護人達を送った。そして、彼に対して、〔427〕牛乳を主とする食事が捧げられた⁷³。

〔さて、〕彼(=ヴィータショーカ)は牧畜人のところに行き、施食を乞うてまわっていた。また、その時、ブドゥラヴァルダナ市において、ニルグランタの在家者が、ニルグランタの足下に平伏するブツダの姿を絵に描いた。〔そして、そのことを〕一人の〔仏教の⁷⁴〕在家者が、アショーカ王に報告した。そして〔それを〕聞いたので王は指示した。

「急いで〔その者を〕連れてこい。」

彼(=アショーカ)の上方1 ヨーjanyaの間でヤクシャ達が〔その指示を〕聞き、下方1 ヨーjanyaの間でナーガ達が〔その指示を聞いた〕。すると、その瞬間に、ヤクシャ達がその者を連れてきた。そして〔その者を〕見て、怒った王は指示した。

「ブドゥラヴァルダナにおけるアーjeeヴィカ達全員を殺害せよ⁷⁵。」

さて、一日の内に、一万八千人のアーjeeヴィカ達が殺害された。すると更に、パーティプトラ⁷⁶において、別のニルグランタの在家者がニルグランタの足下に平伏するブツダの姿を絵に描いた。そして〔それを〕聞いたので、赦すことができなかった王は、かのニルグランタの在家者を親戚と家族ともども屋舎に入れて火で焼き殺した。そして〔アショーカは〕布告した。

⁷²原文では khusta(CN p. 426, l. 38) である。Cf. BHSD p. 206.

⁷³『王伝』には、この文章に続いて、身体が健康状態を取り戻したことが記される。「身則安隱為易得故。」(107b24)。

⁷⁴『王伝』では「時佛弟子優婆塞者語阿怒伽王言。」(107b27) と記し、『王経』も「有一佛弟子見此事白阿育王。」(143b18) と記していることから補足した。

⁷⁵ニルグランタの在家者の行為によってアーjeeヴィカ達が殺害を命じられることについてはやや奇異の感がある。Basham 氏は、このヴィータショーカの物語の事例にも言及しつつ、ニルグランタとアーjeeヴィカという二つの語を混同して使用する仏典が存在することを指摘する (A. L. Basham, *History and Doctrine of the Ājīvikas*, London: Luzac and Company Ltd., 1951, pp. 96-97; 138-139)。また、Mukhopadhyaya 氏もアーjeeヴィカとニルグランタとの関係について詳しく言及する (M, Introduction p. xxxvii, note 1; p. 169)。尚、yāvad ekadivase 'ṣṭādaśasahasraṅy ājīvikānāṃ praghātītāni 「... アーjeeヴィカが殺害された。」 (CN p. 427, l. 8) という文章が次に続くが、『王伝』は「一日之中殺萬八千尼乾陀子於花氏城。」(107c1) と記し、アーjeeヴィカではなく、ニルグランタと対応する語が見える

⁷⁶マウリヤ朝の首都。アショーカはマウリヤ朝の王であるので、首都においてこの事件が起こったことになる。

「私にニルグラタの首をもたらしした者には、1 ディーナラを与えよう。」と。

〔その言葉は各地に〕宣伝された。

さて、かのヴィータショーカ具寿は、夜間には、牛飼いの家⁷⁷に住していた。また、彼が病気を患っていた間に、衣服はくたびれ、頭髪と爪と髭はのびていた。牛飼いの妻には〔或る〕考えが浮かんだ。

< 私達の家に夜の間に住しているこの者はニルグラタだ。 >

〔牛飼いの妻は〕夫に語った。

「あなた、私達に 1 ディーナラが落ちてきましたよ。このニルグラタを殺してアショーカ王に首を渡しましょう。」と。

それから、その牛飼いは刀を研ぎ終えると、ヴィータショーカ具寿に近づいた⁷⁸。一方、ヴィータショーカ具寿は遙か過去〔世〕における知識に注意を向けた。〔その結果、彼は過去世において〕自身が造った諸々の業に対してこの果報が訪れたことを知った。そこで、甘んじて業を受けるものとなり、じっとしていた⁷⁹。かくして、その牛飼いによって、彼（=ヴィータショーカ）の首は切り落とされた。〔牛飼いはヴィータショーカの首を持参し、⁸⁰ アショーカ王に献上した。〔そして、牛飼いは言った。〕

「1 ディーナラをお与え下さい。」と。

また、〔その首を〕眺めて後、アショーカ王は〔何かに〕気が付いた。そして、

< この者の首におけるまばらな毛髪⁸¹は不審である。 > 〔と考えた。〕

それから、医者と看護人達が連れてこられた。彼らは〔その首を〕眺めて後、告げた。

「陛下、これはヴィータショーカの頭です。」

〔それを〕聞いて、王は気を失って地面に倒れた。そこで〔アショーカは〕水をかけられ、立たされた。そして、大臣達は告げた。

「陛下、これでは貪欲を離れた者達にすら危害が〔及びます〕。全ての衆生達に [428] 無畏を施して下さい。」

そこで、王は〔以下のように〕無畏を施した。

⁷⁷ 『王伝』は「後宿大⁸於尼乾子舍寄宿。」(107c06) と記し、ヴィータショーカが泊まった場所を、ニルグラタ所属の建物とする。

⁷⁸ 『王伝』には牛飼いとその妻は登場せず、「有鬼持刀在一面立。」(107c7) と記されており、ヴィータショーカの面前に突如として鬼が現れたことになっている。

⁷⁹ 原文は *tataḥ karmapratiśaraṇo bhūtvāvasthitah* / (CN p. 427, ll. 21-22) である。

⁸⁰ 『王伝』の「持至王所...」(107c9) という記述、また、『王経』の「而將頭至阿育王...」(143c3) という記述により補足。

⁸¹ 原文は *viralāni cāsya śirasi romāni* (CN p. 427, l. 24) である。『王経』も「王即觀之見其頭髮駁奪。心中生疑。」(143c8) と訳し、髪がまばらであったことが記されている。

「今後、いかなる者⁸²も殺害してはならない。」

さて、疑問を生じた比丘達は、あらゆる疑問の破砕者であるウパグプタ具寿に〔以下のように〕質問した。

「如何なる業を造ったために、その業の異熟として、ヴィータショーカ具寿は刀で殺害されることになったのでしょうか。」

上座 (=ウパグプタ) は答えた。

「実に、具寿達よ。彼 (=ヴィータショーカ) は昔、別の複数の生涯の間に、諸々の業を造ったのだ。〔以下の解説を〕お聞きなさい。

昔、すなわち、往時に、或る獵師が鹿達を殺して生計を立てていた。森には泉があった。その獵師はそこに行って、縄と罟を設置し鹿達を殺していた。〔さて、〕諸仏が誕生していない時、辟支仏達が世間に誕生する。 - 仔細〔は省略〕⁸³ - 。〔さて、〕或る辟支仏が、その泉において食事の際の作法をなし終えて泉から上がり⁸⁴、〔獵師が仕掛けた罟の付近の⁸⁵〕樹木の根もとにおいて結跏趺坐した。彼 (=辟支仏) の匂いのせいで、鹿達はその泉に近づかなかった。〔さて、〕その獵師は〔泉に〕やって来て眺めた。鹿達は泉には全く近づかなかった。そこで〔獵師は、そこに有った〕足跡を辿って、その辟支仏のところ近づいた。そして〔辟支仏を〕見たので、彼 (=獵師) には〔或る〕考えが浮かんだ。

<この者のせいで、この災難が起こったのだ。>

彼 (=獵師) は刀を研ぎ終えると、その辟支仏を殺害した。

具寿方よ。どうお考えか。この獵師であった者、彼が、このヴィータショーカなのである。以上〔の生涯〕において、この者 (=ヴィータショーカ) は鹿達を殺したが、その

⁸²原文では na bhūyaḥ kaścit praghātayitavyaḥ (CN p. 428, ll. 1-2) とされているが、『王伝』は「自今已後一切沙門制不聽殺。」(107c14) と記し、対象を「沙門」とする。また、『王経』は「宣令一切不得復殺尼提。」(143c13) と記し対象をニルグラントとする。

⁸³ここで省略された内容として、説一切有部系文献に見られる定型句を推測できる。その定型句とは以下である。asati buddhānām utpāde pratyekabuddhā loka utpadyante hīnānukampāḥ prāntaśayanāsanabhaktā ekapradakṣiṇīyā lokasya 「諸仏が世間に生まれていない時、辟支仏達が世間に生まれる。〔彼らは〕貧しく哀れな者を哀れみ、人里離れた場所で臥座や食事をし、世間で唯一の応供者なのである。」この定型句については以下の研究において詳しく言及される。Cf. 平岡聡『説話の考古学』東京：大蔵出版、2002年、特に p. 167.

⁸⁴原文では tasminn udapāne āhārakṛtyaṃ kṛtvodapānād uttīrya (CN p. 428, ll. 12-13)。『王経』「食竟澡洗還樹下坐。」(143c19) とあり、手などを洗ったことが推測できる。

⁸⁵『王伝』の「在其罟邊樹下而坐。」(107c18) という記述により補足。

業の異熟として、大病が生じたのだ⁸⁶。〔また、彼は〕辟支仏を刀で殺害したが、その業の異熟として、数千年の間、地獄において苦を感受し終わって後、五百の生涯に渡って人間の内に生まれ、刀で殺害され続けた⁸⁷。その業の残余により、現在、阿羅漢となつてなお、刀によって殺害されたのである。」

〔比丘達はウパグプタに質問した。⁸⁸〕

「〔ヴィータショーカが〕高貴な家系に生まれ、そして、阿羅漢となつたのは、いかなる業を造つたことによるのでしょうか。」

上座（＝ウパグプタ）は答えた。

「〔昔、ヴィータショーカは、〕カーシュヤパ正等覚者のもとで出家し、布施に専心した。彼（＝ヴィータショーカ）は、サンガに対する食事〔すなわち〕好ましい粥や好ましい飲み物、〔そして〕招待の数々を、〔常に〕施しをなす施主達に行かせた。また、諸々のストゥーパ⁸⁹には、諸々の傘蓋を載せ、〔429〕大旗と小旗とを〔飾り〕、香・花輪・花・楽団でもって供養をなした。その業の異熟として、高貴な家系において生まれたのである。また、数万年の間、梵行を實踐して後、正しき誓願を立てた。その業の異熟として、阿羅漢となつたのである。」と。

以上、吉祥なるディヴィヤ・アヴァダーナにおける、ヴィータショーカ・アヴァダーナ〔という名の〕第28〔章〕。

<キーワード> Divyāvadāna, ヴィータショーカ, アショーカ

⁸⁶ 『王伝』は、この大病という報いについて言及しない。

⁸⁷ 『王伝』は、人間として五百の生涯の間に殺害されたという報いについて言及しない。

⁸⁸ 『王伝』の「比丘問言。」(107c23)と『王経』の「諸比丘復問優波笈多。」(143c28)という記述により補足。

⁸⁹ 『王伝』はこのストゥーパ供養を記さない。『王経』は供養の対象として「有一佛髮爪塔。」(144a2)と記している。